

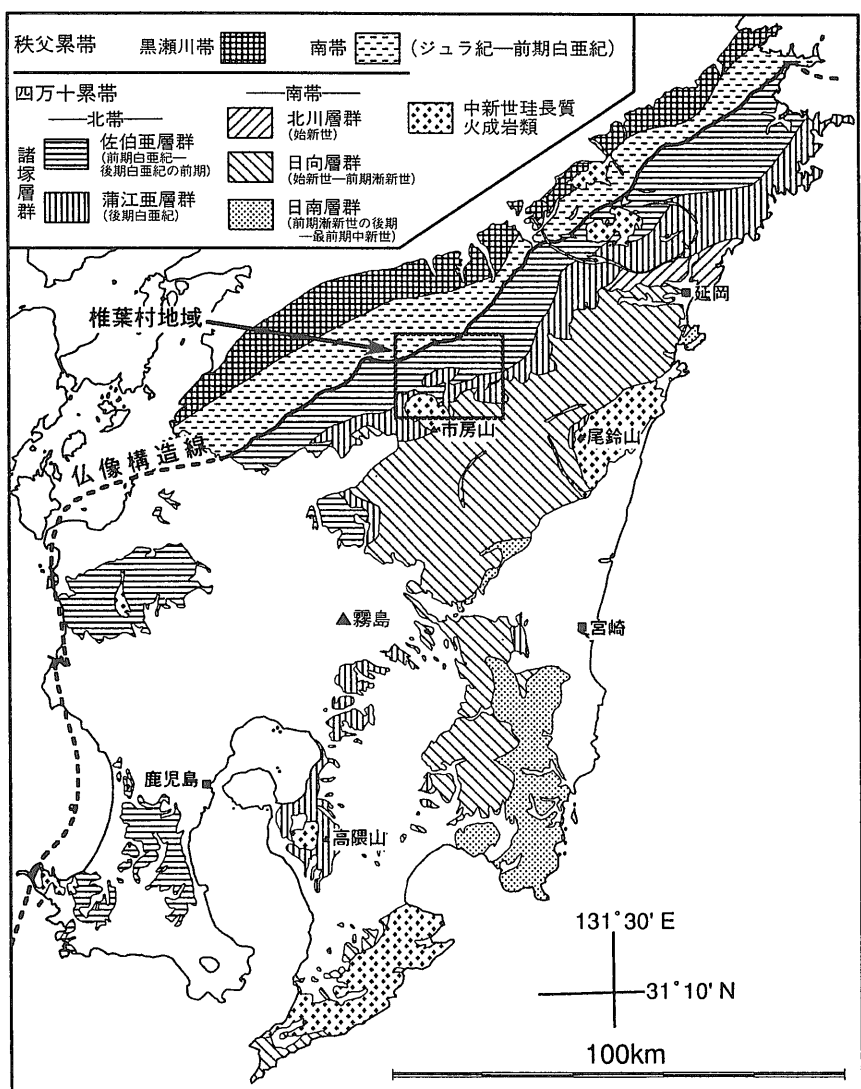
5万分の1地質図幅「椎葉村」

—九州の秘境 椎葉村地域—

齋藤 眞¹⁾・木村克己¹⁾・内藤一樹²⁾・酒井 彰¹⁾

5万分の1「椎葉村」図幅は九州の中央部、阿蘇山の南側に位置し、宮崎県と熊本県の境界にあり

ます(第1図)。中心地の宮崎県椎葉村は平家の落人伝説とひえつき節で知られる九州の秘境中の秘



第1図 九州南部の地体構造分布図

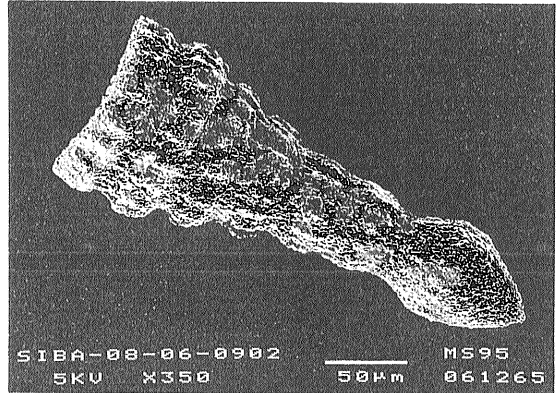
1) 地質調査所 地質部
 2) 地質調査所 鉱物資源部

キーワード：地質図幅、椎葉村、付加コンプレックス、四万十累帯、秩父累帯、市房山花崗閃緑岩、阿蘇-4火砕流堆積物

境です。尾根の標高は1,500mを越え、谷の標高は300mを切るところもある険しい地形で、冬には雪に埋もれるところも多く、南国宮崎のイメージからはかけはなれたところです。交通の便は昔から悪く、現在でも日向から車で約2時間、谷沿いの狭い道を走って、ようやくたどり着きます。このため昔は谷沿いの急峻なルートを避けて、尾根伝いに熊本県側と交流があったところも多く、昭和30年代頃まで尾根伝いに馬を引いて通った道が、今でもわずかに残っています。

この地域の地質は、およそ1億6,000万年から3,000万年前まで(ジュラ紀後期-古第三紀)の間に海洋プレート上の堆積物が海洋プレートの沈み込み時に大陸プレートに掃き寄せられてできた付加コンプレックスと呼ばれる大変複雑な地層からできています(秩父累帯、四万十累帯の堆積岩コンプレックス)。これらの内部には付加コンプレックス形成時にできた大きな断層によっていくつかの切れ目があり、そこを境にいくつかの付加コンプレックスに区分されています。詳しい微化石(放射虫化石、第2図)の研究によってこれらの付加コンプレックスは、北西から南東方向に向かって形成年代が若くなることがわかりました。そして、最も時代の新しい南東側の付加コンプレックスが、地質構造の上では最も下にあり、最も古い北西側のものほど地質構造の上では上にあることがはっきりしました。一般に地層が堆積するときには、時代の古い(先にたまった)ものほど下にあるはずです(地層累重の法則)。しかし、付加コンプレックスでは、地層がたまったあとからすぐに、断層(衝上断層)によって次の新しい堆積物の上に積み重なっていくというでき方をします。このため、通常的地層とは逆に時代の新しいものの方が下になってしまいます。

これらの付加コンプレックスができたあと、1,400万年ほど前に花崗岩マグマが付加コンプレックスを突き抜けて上昇し、地下で冷え固まりました(市房山花崗閃緑岩)。このため、その熱で周囲の付加コンプレックスは焼けてしまいました。その後九州山地が上昇し、また雨水によって削られて、現在のよ



第2図 「椎葉村」地域から産出した放射虫化石の電子顕微鏡写真。Pseudodictyomitra pseudo-macrocephala (Squinabol)。白亜紀のアルビアン-セノマニアン時代を示す。上椎葉ユニット。

うに地表に露出するようになりました。それとともに、市房山花崗閃緑岩は北東-南西方向の正断層によって大きく2つに切られました(いつ切られたかは不明)。この断層沿いでは、温泉も湧き出しています(湯山温泉、この図幅の南端すぐ外側)。

近年(とはいっても9万年ほど前)になると、阿蘇山がカルデラを作った大噴火を起こして、椎葉村地域も火砕流に襲われました。そして、火砕流がもたらした火山灰などは谷沿いに厚く堆積し、自分の熱で再び溶けて固まり緻密な溶岩のようになりました(溶結凝灰岩)。これらは谷沿いに堆積したので、耳川流域や球磨川流域の河川沿いに露出しています。この溶結凝灰岩には冷えて固まるときの割れ目が縦にはいって柱状になっているのがよくわかります(柱状節理)。

ところで、この地域は九州の秘境ツアーのメッカで、椎葉村から熊本県泉村の五家荘を結ぶルートは秘境ツアーのメインコースです。椎葉村はもうすぐ北の五ヶ瀬町とトンネルでつながり、少しは足を踏み入れやすくなります。険しい道をドライブする時に、見晴らしのいいところでちょっと車を止めて、風景を見ながらこんな地質のことを考えたらひとつ別の旅の楽しみ方ができると思います。